

〈関係〉を表す形容詞の意味と用法

——「近い」と「遠い」——

八 亀 裕 美

0. はじめに

「遠い親戚より近くの他人」という表現がある。この表現は、「遠くの親戚より近い他人」ではしっくりこない¹⁾。

また、「駅からほど近いところにマンションを借りた」とは言えるが、「駅からほど遠いところにマンションを借りた」は不自然である。

本稿は、〈関係〉を表す形容詞「近い」と「遠い」について、その意味・用法を、文法的なふるまいも視野に入れながら帰納的に記述するが、その過程を通じて、これらの表現がなぜ不自然になるのかについても考えていきたい。

1. 形容詞論全体の概観と本稿の目的

形容詞の分類については、さまざまな学説があり、一般的には、「属性形容詞」と「感情（感覚）形容詞」に大きく分ける方法が行われているが、本稿では、述語全体を見渡している奥田（1988）などの考え方に従って、形容詞を分類する立場から記述を行う。

奥田（1988）は、述語の意味的なタイプとして、〈運動〉〈状態〉〈存在〉〈特性〉〈関係〉〈質〉の6つのタイプを認める。それぞれについて、工藤（2002）も参考にして簡単に例文を挙げながら箇条書きにまとめておく。

〈運動〉「太郎が椅子を作る」

具体的な時間のなかで展開する現象

典型的には動詞が述語

〈状態〉「足が痛い」

展開はないが、時間の中に一時的に顕現する現象

例外的な動詞と状態を表す形容詞が述語

〈存在〉「庭にごみがある」

時間の中で一時的に存在するものや、

「この山にはまむしがいる」のように恒常的な存在

存在動詞と一部の形容詞が述語

〈特性〉「この部屋は大きい」

恒常的な特性

典型的には特性を表す形容詞が述語

〈関係〉「趣味が同じだ」

複数のものの間の関係

さまざまな品詞が述語

〈質〉「ポチは秋田犬だ」

主語の所属するクラス

典型的には名詞が述語

形容詞は、これらのタイプのうち、〈特性〉と〈状態〉を表すものが中心であるが、一部の形容詞は〈関係〉や〈存在〉を表す。

筆者は形容詞研究の順番として、まず八亀（2008）所収の論文にあるように、〈特性〉や〈状態〉を表すものを中心に記述を行った。また、〈特性〉を表す文と〈関係〉を表す文の連続的なありさまについても、一般的に「比較構文」と呼ばれるものの実態を確認する作業を通じて、八亀（2014）などで帰納的な記述を行った。

本稿では、次の段階として、〈関係〉を表す形容詞である「近い」と「遠い」の語彙的な意味を、文法的なふるまいを視野に入れながら記述する。

奥田（1985）所収の諸論文が述べているように、単語は語彙＝文法的な存在であり、語彙的な意味と文法的な機能は切り離して考えることはできない。本稿では、どのような文の成分になっているか、という点と語彙的な意味の関係に特に注目して、記述を進めていく。

最初に確認をしておきたいのだが、〈特性〉や〈状態〉を表す形容詞の記述は、形容詞の中心的な部分であり、用例も多く、また抽象度も相対的に低いため、比較的容易に進められるところがある。それに対して、〈関係〉を表す形容詞の記述は、

1) 抽象度が相対的に高い

2) 関連する項が複数ある

という2点において、〈特性〉や〈状態〉を表す形容詞の記述よりも難しい。

そこで、本稿では、〈関係〉を表す形容詞の記述のあり方を探るため、具体的なテストケースとして、「近い」と「遠い」の意味・用法を記述してみたい。なぜ「近い」「遠い」という二つの形容詞をテストケースとして用いるのか、という点については、次のような理由がある。

- ・典型的な距離の用法では、〈存在〉を表す側面もある。(将来の〈存在〉の記述にも参考になる)
- ・2語を同時に扱うことで、対義関係にある二つの形容詞の対照的なところと独自の部分を整理することができる。

また、まつもと(1979)が「に格の名詞と形容詞のくみあわせ」を帰納的に記述するなかで「近い」や「遠い」と「に格」の名詞のくみあわせを記述する際に指摘している次の点も重要である。

客観的なかわりのむすびつきをつくる形容詞は、具体的、個別的な状態、性質を離れた、関係そのものをしめしているので、lexicalな側面をおとしやすく、grammaticalizationをうけやすいものと思われる。(まつもと1979:255)

2. 関係を表す形容詞と特性を表す形容詞

先に述べたように、形容詞は主に〈特性〉と〈状態〉を表す。本稿で扱う〈関係〉を表す形容詞は、〈特性〉との連続的な側面が見られる。この点については、八亀(2008)でも指摘をした。また、八亀(2014)では具体的に「比較構文」と呼ばれるものの実態を帰納的に記述することを通して、その連続的なありさまを俯瞰した。ここでは、それぞれが述語として機能する場合を取り上げながら、今後の議論に必要と思われる基本的なポイントのみを振り返って確認しておきたい。

「このバッグは大きい」のように、主語の恒常的な〈特性〉を表す形容詞述語文は、基本的に主語のありさまを特徴付ける文であり、客観性が高いように一般的には思われている。しかし、西尾(1979)など形容詞研究のさまざまな論が指摘するように、形容詞がさしだす〈特性〉は、純粋に客観的なものではなく、話し手の評価的な側面が本質的に絡みついている。「このバッグは大きい」という文では、話し手が、これまでの経験や、これからこのバッグをどのように使いた

いかのといった目的意識などをベースとしてなんらかの「基準」を設け、その基準との比較の中で、「大きい」という評価的な特徴付けを行っている。このように、〈特性〉を表す形容詞述語文は、非常に広い意味では、一種の比較表現であり、このことは、認知言語学の分野でも指摘がある(Heine 1997)。

しかし、一般に〈特性〉を表す形容詞述語文では評価的な側面は背景に退き、主語の特徴付けの側面が前面に出てくる。

これに対して、〈関係〉を表す形容詞述語文は、述語となる形容詞の語彙的な意味に〈関係〉が含まれており(「近い」「遠い」「親しい」「親密だ」「疎遠だ」など)、基本的には複数の項の関係性を述べる文である。構文のタイプとしては二つの種類が認められる。

タイプ1

AとBは[形容詞]

このタイプは純粋に複数のものの関係を述べている。

タイプ2

AはBに／から／と等[形容詞]

これらは、Bとの関連によってAを特徴付けている。

このうち、典型的な〈関係〉を表す形容詞述語文はタイプ1であり、タイプ2は、〈特性〉を表す形容詞述語文の延長線上にある。タイプ1では2つの項は対等な資格を持っているが、タイプ2では、BはAの特性を説明するために従属的にさしだされている(このあたりの連続的なありさまなどは、八亀(2014)などを参照。)

3. 記述の方向性

「近い」「遠い」の二つの形容詞がどのような文の成分になっているかに着目し、

1) 述語として機能している

2) 規定語として機能している

の二つの場合について、記述を行う。この二つは、形容詞の基本的な機能である。

意味の整理においては、具体的な関係を表すものから記述を始め、抽象的な関係を表すものへと記述を進めていく。概略、次のような順序になる²⁾。

距離

↓

時間

↓

関連性

↓

婉曲

抽象化が進むと、最終的に「近い」は比況・婉曲で遠回しな肯定を表すようになり、一方で、「遠い」は「(およそ)～にはほど遠い」というフレーズで、遠回しな否定を表すようになる。

この具体的距離から、肯否判断への抽象化の道りは必ずしも鏡像的ではない。大まかに言うと「近い」の方が広い用法を持っており、抽象的な用法も多い。これに対して、「遠い」が抽象的な用法になる場合はフレーズ化している。

以下、実例を元に帰納的に記述をしていく³⁾。

4. 「近い」の分析

4.1 二つのものの具体的距離

4.1.1 述語として機能している場合

このタイプが典型的な「関係」を表す文になるが、用例はそれほど多くはない。大半の用例は、次の4.2で扱うタイプになる。

AとBは近い

二つ(の距離)(両～)は近い

- ・またホーガンの言うとおりに、スウィングを通して両ひじの距離は近いに越したことはありません。

(GOLF DIGEST 2001年6月号(第41巻第8号))

AからB(の距離)は近い

AからB(まで)は近い

- ・ハイツ浜から村の家まで近くはない。(うみ)

4.1.2 規定語として機能している場合

作例では、「近いAとB/近いAからB」の形であり、「近い宮古島と伊良部島を結ぶ橋がもうすぐ完成する。」のような文が想定されるが、実例では確認することができなかった。作例も少し無理があるような印象が残る。

4.2 基準からの具体的距離

4.2.1 述語として機能している場合

このタイプは、Aの特徴をBとの関係で述べている。その意味で、「関係を表す形容詞を用いて」Aの特性を表す文、であるとも言える。Bには空間的な位置を表す名詞が来る。

AはBから近い

- ・「仙波さん。なぜ塚原さんが瑠璃ヶ浦に行かれたのか。御存じないですか。瑠璃ヶ浦といえば、あなたの奥さんの実家から近いですよ。そのことと何か関係があるんですか」(真夏333)

- ・三村はその薬局で木田さんのためのヒルドイドを手に入れることができた。大ビルは彼の会社からは近い。今後、買いに行くにも便利であった。(秘事;半所有者)

AはBに近い

- ・杉並区の加代の前住所へ行った。区の北端で練馬区境に近かった。(穂高屏風岩)

4.2.2 規定語として機能している場合

規定語となる場合は、作例ではある程度考えられるが、実例はなかなか見つからない。「Bに近い部分」というフレーズ化した用例は確認することができる。

Bと近いA

Bから近いA

Bからの距離が近いA

Bに近いA

- ・なまじ都心に近い町で、タクシーを待つ人間も、やってくるタクシーの数も少ないから、変に感情移入してしまうのだ。(地下街54)

Bに近い部分

- ・中心とヘタに近い部分は糖度が落ちます。(フルーツカッティング)

- ・本マグロの腹の脂身で頭に近い部分、つまり大トロと呼ばれる部分のことだ。(プロが使う秘密の日本語)

4.3 時間的な隔たり

4.3.1 述語として機能している場合

空間的な隔たりから時間的な隔たりへの拡張は、広く観察されることであるが、順番に整理をしていく。基本的に未来のことを述べる。過去にさかのぼって、最近起こった、という意味を表すものは、見つけることができなかった。

この段階になると、2つの項の関係を述べるという構造はもう基本的に見られない。文法化が進んできている。

<Aが近い>

いわゆる漢語サ変動詞の語幹や、動詞の連用形から派生した名詞、あるいは「花火大会」「クリスマス」などのように、動作性名詞やイベントを表す名詞が主語になることが多く、まもなくある事象が発現する

ことを述べる。「まもなくだ」あるいは「まもなくAがやってくる」に置き換えができる。「Bから」は基本的に現れない。

後で見る「遠い」の場合は、時間的な隔たりを表す場合、「まだ遠いー遠くない」のように肯定表現も否定表現も見られるのだが、「近い」の場合は否定表現はまれである。

- ・ とうやら幕引きは近いようだ、と傍観して西口は思った。鑑識に再現できないほど、事故の起きる条件が難しいのであれば、川畑重治がわざと起こした可能性は極めて低いということになる。(真夏395)
- ・ ユダヤもイスラエルも関係ない。要するに、人類に対する救いが近いとイエスは言っている。ですから、イエスの言葉が正しいと認める人間は、まさにその救いの対象に入れるわけです。(ユダヤ・キリスト・イスラム集中講座)
- ・ あまり条件のいい仕事でないものは、たいてい、締切が近い。昨夜もほとんど寝ないまま午前中に仕事を仕上げ、ついさっきバイク便で送ったところだった。(青春と読書)

なお、次のように、形式名詞で準体的に受ける例も多く、この場合は述語的な用法に準じるものとして整理するほうがよいだろう。

- ・ 「(前略) 実際、真相を知った塚原さんに、それを公にする気はなかった。だが、仙波さんの死期が近いことを知り、その前に彼の願いを叶えてやりたいと思ったんじゃないだろうか。(後略)」(真夏451)

<Bに近い>

Bに「夜明け」「正午」「真夜中」「午後2時」など時間にかかわる名詞が来て、時間的な近さを述べるものもある。「もう」「もはや」という副詞と共起することが多い。「Aは」は基本的に現れない。

- ・ もう真夜中に近かろう。(内蔵助、鯛の構え)
- ・ もう、時間は八時に近かった。(早春物語)

4.3.2 規定語として機能している場合

述語として機能している場合と同様、近接した未来を表すが、フレーズ化したものが多く、述語のときに見た、サ変動詞や動詞の連用形から派生した名詞を受けるようなものは、作例では作ることが可能であるが、修飾部が重すぎるからか実例は見当たらない。

すぐ上で整理した具体的な時間帯に近いことを述べるものがまず見られる。被修飾名詞は「時間」「時間

帯」「ころ」などに限定されてくる。

- ・ いつの間にか昼に近い時間となっていた。(暗いところで待ち合わせ)⁴⁾
- ・ また、「近い将来」「近いうちに」のようにフレーズ化したものが多く観察される。
- ・ 吉本 (前略) わりに近い将来に、なんていいますかね、今でも心臓に人工のあれでやっている人がいますけれども、その種のことがわりあい発達してきて、人工関節であれしてというようなことというのは、わりあいに近い将来にあり得ることだなという気がします。(音楽89)
- ・ 普選を「早晚実行」すべきものとして時期を近い将来に設定した。(政党政治と天皇)
- ・ 坂本 いまは、そういうイメージを与えるということは、わりと、非人間的だぞとか、おどかしにみえちゃうけれども、もっとすんなり、近いうちに変わっているような気がするんです。(音楽90)
- ・ あまり例はないが、時代・年代的に離れていないことを表す例がある。この場合は、時間軸的には、未来方向でも過去方向でも使うことは可能である。
- ・ イェイツとハイドに近い時代で最良のものとして(後略)(妖精のアイランド)

4.4 関連性の隔たり度

4.4.1 述語として機能する場合

抽象化が進み、関連性の隔たり度が近いことを表すものを、ここに整理しておく。この場合は、「AとBは近い」のように関係性だけを表す用例はほとんど見られない。また、「AはBから近い」のような「から格」の用例もなく、基本的に「AはBに近い」の形で、Aの特性をBとの関連性が近いことでさしだしている。次の4.5への連続面である。

意味的なパターンに分けて示す⁵⁾。

<系統関係>

血縁や人間関係の隔たり度が近いことを表す。規定語の用法の方が多いが、述語用法も若干見られる。

- ・ 徳川齊昭の七男一橋慶喜、当時十七歳。慶福はわずか八歳の子供だけど、血筋は家定のいとこで一番近い。慶喜は賢明のほまれ高く、すぐにでも將軍が勤まるとされた。(お墓曼陀羅)

<色>

色を表現するのに、「近い」を用いる例は予想以上に多い。Aの色の説明として、Bを提示して、それに似た色合いであることを提示する。これも規定語としての用法が多いが、述語用法も見られる。なお、この

用法は、「遠い」にはない。

- ・まっ白というよりも透明に近かった。(天使の樹)
- ・バッグの色は赤というよりも朱に近い。(北都物語)
- ・蜜蠟の蠟燭は、甘い香りがする。色は橙色に近かった。(ステュクスの一族)

4.4.2 規定語として機能する場合

Bに近いAの形で、関連性の隔たり度が近いことを表している。

<系統関係など人間関係>

規定語としての用法が多く見られる。

- ・一番近い肉親じゃないか、なんでもないんだ、僕は(後略)(新ハムレット)
- ・一世紀あまり前の私の近い先祖は(後略)(風塵抄)
- ・宮内大臣を長く務め、天皇に近かった田中光顕が(後略)(銅像に見る日本の歴史)

<色>

「遠い」にはない用法で、規定語で多く見られる。微妙な色の表現に用いられている。次の4.5への連続面でもある。

- ・肌色に近いチークでほんの少し陰影をプラス。(美的)
- ・白地に黒ではなくて、限りなく白に近い灰色だから(後略)(真夜中の太陽)
- ・紺地に、手書きの椿の柄がついている。その深紅に近い色合いは、曜子の口紅の色とよく似ていた。(地下街36)

4.5 比況・婉曲

4.5.1 述語として機能する場合

もっとも抽象化が進んだもので、コンピュータ的になっており、文法化が進んでいる。断定を避けるものは「ほとんど～だ」「～ようだ」「～みたいだ」などに置き換えることが可能である。

はじめに、まだ文法化があまり進んでおらず、ある程度2つの項の関連性を述べていると思われる(先の4.4に近い)用例から見ていく。

AはBに近い

- ・坂本 だから、ダッと見て、引っかかれれば戻って、つまり、本の場合、少しビデオやCDに近いでしょう。レコードは、むしろ映画に近いような気がして、勝手に後戻りとかがしにくい。映画は絶対ダメだろうけど。(音楽59)
- ・坂本 (前略)これはフランス人に聞いたんです

けど、僕らがローリー・アンダーソンが新しくて、カッコイイ、カッコイイと騒いでいたら、あれはぜんぜん新しくない。あれならフランスの田舎に行きゃ教会でやってる、というふうに言われたんで、ああなるほどと思って。／中世からつながっているカトリック教会の音楽とか、そういうものに近いと、そう言われて、はじめて、ああそうかと思ったんですけど。(音楽73)

- ・これは映画館に行って見たり競技場に行って見る場合の入場料のイメージに近い。(テレビ43)

ここで興味深いのは、関連性を「位置づけ」として距離的なものの比喩としてとらえるような表現が見られることである。空間的なものから関連性への意味拡張のあり方を示している。

- ・吉本 (前略)たとえば、「ライディーン」とか「東風」とか「テクノポリス」とかいう作品で、坂本さんのグループでもいいわけですが、その自己主張に必然的になったんだという場合に、この並んだなかでの位置づけといたしましうか、地図といたしましうか、どういうふうに位置づけたらいいのかなということなんですが。／例えば、このところに、また丸つけて、坂本龍一の『マルチプラス』を聴いたとしますね。そうしたとき、ここらへんじゃないとか、ここらへんとかいう関係じゃないかと言うとすれば、どこと関連づけたらいいのしょう…。／坂本 クラフトワークといちばん近いのかな…。／吉本 ああ、ここらへん、やっぱりそうですか。(音楽99)

少し先取りになるが、「遠い」でも同じように「位置づけ」として比喩的に捉えるものが見られるのでここにあげておく⁶⁾。

- ・坂本 ええ、あります。はっきり言って。とくに「雪列車」[前川清に提供した曲]はそうですけれども、音楽として自分にとってずいぶん遠いもんだというまず位置づけがあって、演歌なり歌謡曲というのは、一種、情念的なものだし、その情念的なものがスタイルとして、あるステレオタイプなパターンにまでなってしまったものですから、それを壊すという意味合いと、それから、あるきちっと、かなり狭い、限定されたスタイルのなかに自分がわざと入って新しくつくり変えるという、そういう意味では、ものすごく自分にたっても実験的なことでした。(音楽104)

さらに文法化が進むと、「Bに近い」全体がくみあ

わせ述語的になり、「近い」はコピュラ的に働き、「A ≡ B」であることを述べる文になる。「～ようだ」「～みたいだ」に近く、置き換えも可能である。

AはBに近い

- ・すべきこともなく、二時間近い時間をこの空間で過ごすのは拷問に近い。(図書館の神様54)
- ・坂本 やはり古典という意味に近いのかな。つまり、バリのガムランも持って行くし、たぶんモーツァルトもいくつか入るだろうとか、ドビュッシーは入れたいとかいう、やはり古典に近いんじゃないですか。(音楽27)
- ・そこまで行くと、もう子供のケンカに近い、と亜由美は思った。(逃げ込んだ花嫁)
- ・その時の彼女は薄化粧で素肌に近かった。(何だ可んだ)
- ・チャーター機という言葉はタブーに近かった。(昭和のふるさと物語)

また、Bに心理的な意味を持った名詞が来て、「そういう心境になった」という意味でフレーズ的に用いられている例がいくつかパターンとして取り出せる。

- ・なにか冷え冷えとした一人だけ取り残されたような寂寥感に近い。(愛のごとく)
- ・ダルタニヤンの心理は達観にも近かった。(二人のガスコン)

次の例も述語用法に準じて整理できる。

- ・人々はおれを倨傲だ、尊大だと言った。実は、それがほとんど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。(山月記)

4.5.2 規定語として機能する場合

比況、例示として働いており、「ほとんど～の」「～のような」などに置き換えができる。

Bに近いA

- ・坂本 対話しているんだと思います。(中略)メロディーじゃなくても、音色の一つだけ、あるところから引用しているとか、いままでの文脈とは違うところでこれはこのくらい突出しているとか、そういうことを読み取るのはとても楽しくて、そういう意味では対話に近いことをしてるんですね。(音楽63)
- ・ここは天に近い場所ではなく、限りなく地底に近い場所だ。(鬼降る森)⁷⁾
- ・この治療は中断に近い形で終了したようだが、(後略)(ビートルズ)
- ・労働者は経営者と対等に近い地位につき(後略)

(公益とは何か)

- ・丘というより畝に近い盛り上がった土の背後に(後略)(レッドサンブラッククロス)

次の例のように被修飾名詞が「状態」などになると、「～ように」と置き換えられる。

- ・お互いの呼吸でよごれた空気のために仮死に近い状態になって(後略)(上海読本)

最後に、この4.5で整理した用法のさらに進んだものとして、「[数値]に近い」で「約／ほぼ／およそ[数値]だ」に相当する用法がある。述語用法、規定語用法をまとめてここで挙げておく。

- ・坂本 また、ちなみにバリ島の音階というのは、二の七乗根に近いんです。それはガムランなどに使う音階の近似値ですけど。(音楽28)
- ・支店長室に訪ねて来る客の数は、歴代支店長の三倍近かった。(城山三郎全集)
- ・文部省に登録されている宗教法人の数は、一時、二十万に近かった。(双子姉妹の事件簿)
- ・低い植え込みの中から聳え立つように、御影石の獅子が全長四メートル近いその猛々しい姿を見せていた。(赫い月照)

次のような場合は、「ゼロに等しい」の意味である。

- ・日本についての実務的知識はゼロに近かった。(さらば吉田茂)
- ・収入は皆無に近かった。(場所)

これらの例を見ると、関係を表す「近い」はまつもと(1979)が指摘するように、文法化が進み、「断定」(A=B)に対して「比況・婉曲」(A≡B)を表すコピュラ的になっている。動詞述語のムード・モダリティー研究においては、推量表現がその中心となっており、いきりの形が表す「断定」とは何か、という点については、まだこれから考えるべきことが多いように思うが、このような婉曲的な表現を観察することが、その問題を考える一つの契機となるかもしれない。

以上が「近い」の語彙的な意味の記述である。以下、これに対応させながら、対義語と位置づけられる「遠い」の意味を帰納的に整理していく。

5. 「遠い」の分析

「近い」の対義語である「遠い」についても同様に観察していくが、「近い」に対して「遠い」は自由な

用例が少なく、比較的固定的な表現の中に現れることが多い。

5.1 二つの場所の具体的距離

このタイプが典型的な2者(以上)の「関係」を表す表現になるが、「近い」と同様に用例は少ない。大半は、5.2のように、Aについて、Bとの関係から特性をさしだす表現である。Bには空間的位置を表す名詞が来る。このタイプの規定語用法は見当たらない。

AとBは遠い

AからB(の距離)は遠い

AからB(まで)は遠い

- ・私なんか十八歳の時に九州から出てきたのよ。この距離は遠いよ。それを思えば自由が丘と青山なんて何ヨ…」イヤイヤ、そうだよ。 (ひさしぶりの引っ越し)
- ・けれども白河から紀伊熊野は遠い。買い付けの遣いという役目は勿論大事だったが、半分は厄介払いだった。(姫神さまに願いを)

5.2 基準からの具体的距離

5.2.1 述語として機能する場合

Aの特性を、Bとの空間的な隔たりが大きい、という点に認めて述べる表現である。5.1と同様に、Bには空間的位置を表す名詞が来る。Bが「ここから」の場合は省略され、Aのダイクティック・センターからの空間的隔たりを述べる⁸⁾。

AはBから(より)遠い

Aは(ここから)遠い

- ・[その湖は] いずれにしても旭川からも帯広からも遠い、山奥の湖には違いない。(銀河の雫)
- ・「(前略)あれのもっと向こうの向こう。ここから自転車で十五分かかるし、わりと遠いかな」(象のダンス)
- ・お風呂屋も随分、遠いのねえ。(海と毒薬)
- ・「でも大丈夫かあ? 玻璃ヶ浦は遠いぜ」(真夏7)

否定の場合「そんなに」「そう」「さして」などと共起することが多い

- ・「同じことよ。新幹線と電車を乗り継ぐだけじゃない。駅からはそんなに遠くないし、地図があれば大丈夫よねえ」(真夏7)
- ・修吾は本社からそう遠くないので誰かに出会わないとも限らないと思ったが、そのまま照れくさを紛らわして歩いた。(近くて遠い旅)

- ・伊東とてさして遠くはない。馬をとばせば一時(二時間)掛からぬうちに着いてしまう。(木曾義仲下)

5.2.2 規定語として機能する場合

Bから(より)遠いA

述語用法のときと同様、「Bから」が明示されず、漠然と遠方を指すことも多い⁹⁾。

- ・また、たとえば、酒屋さんから遠い所に住んでいる人にとっては、ビールを買って帰るのは(後略)(経済のしくみ)
- ・例えば、駅に近い物件の家賃は高く、駅から遠い物件は安いのが一般的ですが、(後略)(家庭をオフィスにするSOHO読本)
- ・水中眼鏡を外し、素晴らしい、と湯川はいった。「君が自慢したくなるのもわかる。日本人は愚かだな。こんなにきれいな海がすぐ近くにあるというのに、わざわざ遠いところへ行きたがる」(真夏450)

5.3 時間的な隔たり

5.3.1 述語として機能する場合

Aは(／が)遠くない／Aは(まだ)遠い

述語用法では、現時点から未来への時間的隔たりを表す。「遠くない」で「まもなく実現する」および「まだ遠い」で「実現が先である」ことを表す形に表現の固定化が見られる。「B(=いま)から」は現れない。「Aが近い」のところでも触れたように、「近い」の場合は、時間的な隔たりを表す場合は肯定表現にほぼ限られているが、「遠い」の場合は肯定表現も否定表現もある。

- ・乳がんの再発を知るや「死がそんなに遠くないかもしれないと考え初めて」(生涯発達の心理学)
- ・現在、着々と研究が進められている。実用化は遠くないだろう。(薬は体にどう効くか)
- ・だが、梨枝にとってデザイナーへの道はまだ遠いようである。(凍土の狩人)

過去への用例は、作例ではあり得るように思うが、実際にはなかなか見つからない。

- ・愛しい人と暮らした日々はすでにもう遠い。(作例)

5.3.2 規定語として機能する場合

未来を表す場合、「遠い先」「遠い話」などに固定化してきている¹⁰⁾。

- ・闘争の爪痕を無残に残し、復旧はまだ遠い先だった。(ストロボ)
 - ・このシングルベッドの上でひっそり息を引き取るのかもしれない。そしてそれはそう遠い話ではなかもしれない。(ピアノ・サンド)
- 過去を表す場合も、フレーズ化が進み、「遠い昔」「遠い過去」「遠い記憶」などに固まってきている。
- ・「パンクの時代すら、もう遠い昔の話ですものね」(少女達がいた街)
 - ・バスクという言葉を、はるか遠い昔にお母さんから聞いたように思う。(冬の翼)
 - ・章は、自分も目の前の病院の廊下の壁の向こうに遠い日の幻影を追いながら、囁くように訊いた。(少女達がいた街)
 - ・その息づかいが彼女の遠い記憶を刺激したからである。(耳すます部屋)

5.4 関連性の隔たり度

5.4.1 述語として機能する場合

「近い」の時に観察された「色」に関する表現は「遠い」にはない。また、「系統関係など人間関係」を表す場合も、後で見る規定語で「遠い親戚」「遠い存在」などの固定的な表現だけで述語用法はほとんど見られない。以下のような例(二人間の関係性について述べる例)があるが、これも臨時的な比喻表現のようでもあり、典型例とはしにくい。

- ・これは不信感のあらわれ。「師」との距離は無限に遠かった。(回り道を選んだ男たち)

5.4.2 規定語として機能する場合

<系統関係など人間関係>

「遠い親戚」「遠い先祖」「遠い存在」などに固定化されてきている。「Bから」に当たる表現はないのが普通である。

- ・「うちは両親とも死んじゃってるんですよ。遠い親戚に面倒を見てもらってるんで、帰るところもないから」(ネバーランド)
- ・このように考えると、薩摩の土地は神話の舞台で天皇家の遠い先祖とつながりがあるだけでなく(後略)(日本神話の考古学)
- ・ロッキー山脈をへだてて会うこともない父が、別の世界に住む五年後に再会してみると、遠い存在になっていた。母の血が強く意識された。(海の祭礼)
- ・胸がちくちくする。 信之くん。 同じ校舎にい

るのに、今では遠い存在だね。友達より遠くなっちゃったね。(好きから始まる冬物語)

被修飾名詞が形式名詞や語彙的意味の漠然とした名詞の場合、「認識が届かない、理解の域を超えている」ことを表す。「遠いこと」「遠い世界」「遠い話」などに固定されている。述語用法では対応するものはない。

- ・教科書や本を読んで知っていた「戦争」ひどいことだと思っはいたけれど、何か遠いことのように思っていたほくたち。(地域から調べよう)
- ・勝利の報せばかりが続き、死はまだ遠い世界の出来事であった。(忘れ得ぬ翼)
- ・物理的には近くても、心理的には非常に遠いところにあるのです。(才能論)

5.5 遠回しな否定

5.5.1 述語として機能する場合

まず、「近い」の時と同様に、関係性の隔たりについて述べるもので、かなり語彙的な意味が薄くなり、「不一致」を表すようになってきているが、「遠回しな否定」までは文法化が進んではおらず、2つの項の関係性の遠さについて述べているものについて、最初に整理しておく。

- ・坂本 [ユーミンの音楽について] だけど、常套句みたいなのがなくてね、例えば中島みゆきの場合、なんとかかんとか九月、なんとかかんとか九月とうのが、一種の常套句の積み重ねで、その、なんとかかんとかが、そんなによく逐一わからなくても、九月、九月、九月ということによって、なにかある音楽のストーリーが出来ちゃうとするならば、ユーミンの場合、それからはずいぶん遠いと思う。(音楽135)
- ・パリで生活する社会学徒・浅野の眼に、日本のパリ・イメージは「実相」から遠いと映ったに違いない。(言語都市・パリ)

AはBにはほど遠い

最も文法化が進んだ形で、「～にはほど遠い」に固定されている。遠回しな否定ともいうもので、「ちょっとBとは言えない」などに言い換えが可能である¹¹⁾。「まだ」と共起することが多い。

ここで、最初に触れた点を確認しておくと、「ほど遠い」はここで整理するように遠回しな否定であるが、「ほど近い」は具体的な距離の隔たりにしか用いることはない。

- ・「真相は闇の中だ」不意に湯川がいった。「あれこれと仮説を述べたが、推理と呼ぶには程遠い。所詮、単なる想像にすぎない。(後略)」(真夏426)
- ・ここ最近のザカリアンの症状の進行は、まだ命に関わる事態にはほど遠い。(太平洋の薔薇下)
- ・目立ってしまったということは、まだ空気にはほど遠いということではないか。(真昼の夜空)

5.5.2 規定語として機能する場合

Bに(／と)はほど遠いA

「予想されるBとはかけ離れた現実のA」を表す固定されたフレーズになっている。「およそ」と共起することが多い。

- ・およそ剣聖には程遠い風貌だったが、その下段の構えに、隙は一点も見えなかった。(ともだち)
- ・ナオミが抱く追悼のイメージとはほど遠い、テキサスの空気のような、からっとした集会だった。(安達ヶ原の鬼密室)

ここまで、「近い」の記述と対応させながら、「遠い」を分析してきた¹²⁾。用例数全体からいっても、また用法の広がりを見ても「近い」の方が広く用いられている。

また、どちらも、最も具体的・基本的な意味である距離的な隔たりを表すものから、時間的、関係の隔たりを表すものへと抽象化が進み、最後は「遠回しな肯定／否定」を表すものへと文法化が進んでいることが確認された。ただし、細かい表現を対照してみると、そのありさまは必ずしも鏡像的ではない。

ここで節を改めて、関連する表現として「近くの」「遠くの」の用法を簡単に整理しておくことにしたい。

6. 「近くの」「遠くの」

ここでは、「近い」「遠い」の規定語として用いられる場合と関連して、「近くの」「遠くの」の意味・用法を羅列的になるが整理しておく。

6.1 「近くの」

「近い」が規定語として機能する場合との置き換えなどを考えながら、整理していく。具体的な距離の用法と、数値の用法に限定される

<φ近所の> ※「近い」に置き換え不可能

この用法が、「近くの」を特徴づけるもので、「近い」に置き換えることができない。最初に提示した「近く

の他人」とは言っても「近い他人」とすると、血縁関係があるようで不自然な言い方になるのはそのためである。

- ・恭平はリュックサックを下ろし、籐の椅子に腰掛けた。何気なく室内を見回す。近くの海を描いたと思われる油絵が、額に入れて飾られていた。(真夏27)

- ・近くの水路のそばまで行き、きよろきよろとあたりを見回した。尾行している刑事に対しての演技だった。(真夏421)

- ・玻璃ヶ浦に越してきて一か月ほど経った頃だ。友人に誘われ、学校からの帰りに近くの展望台に寄った。(真夏449)

- ・短時間で運動になるものは機械体操(金棒)に限ると思って近くの外濠公園へ行行って見た。(近きより)

- ・「お客らしい人が来たら、呼んで、と言っておいだから」と、典子は言って、芳恵を近くの、洒落たフランス料理の店に連れて行った。ランチといっても何千円か取る。(二階の沈黙)

- ・これよりかなり小さな凶形がもう一つあった。何の形だろうと勇樹が見方をいろいろ変えていると、近くの草むらでガサリと物音がした。(魔球)

<視力関係> (少ない／対で出てくることが多い) ※「近い」で置き換え可能

- ・でも、めがねはつかれる。遠くのもののははっきり見えるようにはなりましたが、近くのもののはぼやけてしか見えません。(いのちをうばった神様)
- ・近視、乱視、あるいは遠視のときは物がはっきりと見えません。また、遠くのもののははっきり見えるのに、近くの細かいものがよく見えないときは、老視が疑われます。(目の病気Q&A)

<Nの近くの> ※「Nに近い」で置き換え可能

- ・四十五年ほど前、つまり、戦時中のことです。当時、私は徴用工員として、ニューギニアの近くのハルマヘラ島にいました。(現代かたぎ考)
- ・横川の駅の近くまで焼けてきていましたよ。大粒の雨が降るので、あの時、駅の近く Jsの民家へはいったのですが(後略)(日本の原爆記録)

<N近くの> ※「Nに近い」で置き換え可能

- ・中国原産の外来種。もともとは観賞用として栽培されたものだが、人里近くの林などに野生化したものと思われる。(山菜)
- ・中でも五色沼は沈澱鉱物による神秘的な水の色で有名だ。そしてさらに不思議な鉱泉水も五色沼近

くの山から湧水する。磐梯山山麓は名水の名所である。(日本の名水)¹³⁾

<[数量] 近くの> ※「[数量] (に) 近い」で置き換え可能

- ・(前略) 捕鯨船がひしめいていた。千八百四十年頃の全盛期には、中部太平洋で毎年五百隻近くのアメリカの捕鯨船が操業していたのである。(オセアニア)
- ・まるで「臥薪嘗胆」の故事のように、しかも三百年近くの年月にわたっても恨みを忘れず、毎年この日になるとカタルーニャの独立を求める運動が盛り上がる。(バルセロナ賛歌)
- ・詰め替え可能用品や再生紙使用商品を買うといった行動は6割近くの人が、またエコマーク商品の購入については4割近くの人が実行している。(環境白書)

6.2 「遠くの」

圧倒的に、漠然と遠方を指すことが多く、「どこか〜」「はるか〜」「〜ほう」「〜もの」「〜何か」という使い方が多い。また特徴的なこととして、山など遠景が被修飾名詞になることが多い。

最初に示した例で「遠い親戚より近くの他人」の前半は「遠くの親戚〜」という言い方も不可能ではない¹⁴⁾。それは、「遠くの」には、二つ目に整理するように「遠くにいる」の意味・用法もあるためである。しかし、何か違和感があるとすれば、「遠くの」と言えば被修飾名詞には最初に整理する「遠景」関連が来るのが大半であるためであろう。

<φ 遠くの> ※圧倒的にこれ 「近くに見える」で置き換え可能

- ・ペットボトルの水を飲みながら、おにぎりを頬張った。窓の外には、早くも海が広がっている。今日は雲の少ない晴天で、遠くの海面はきらきらと光り、手前では白いしぶきが上がっていた。(真夏6)
- ・ロケットはさっきよりも遙かに遠くの海上に落下した。(真夏117)
- ・愕然とし、立ち尽くした。節子の目は、なぜか窓の外に向けられていた。朝焼けが遠くの雲を赤く不気味に染めていた。(真夏431)
- ・カメラさえ持たず、京都駅のホームにさりげなく降り立ったのである。風まじりの時雨がしらじらと渡っていた。遠くの山の頂きに雪の予感がただよっていた。(懐情の原形)

・機上から、荒々しい北極の氷原をみた。これはまったく死の世界である。そのうす暗い青い氷原の、はるか彼方、遠くの地平線に、小さな赤い玉がぶつんといふ。ピンポン玉とみえる赤、これが極北の太陽だ。(私の絵本ろん)

<φ 遠くの> ※「遠くにいる／ある」で置き換え可能

- ・役目をきちんと果たし、人間の命令をよくきくのも、群れを作る動物の性格です。また、ウォーンという遠くは遠くの仲間に知らせる声で、遠くで鳴く声につられて鳴いてしまうようです。(おもしろクイズいぬ・ねこ事典)
- ・眠ったふりをしていると、黙って静かに行燈に油を差して出て行った。廊下をへだてた遠くの部屋から、芸者や幫間を上げて、歌ったり踊ったりしている物音が聞えてくるが(後略)(果てもない道中記)

<遠くの方> ※置き換え難しい

- ・ぢきに、真赤に焼けてゐた空の色が何処となく褪せかかつて来た。入江の向うの遠くの方から、紙の焼けた灰の様なものが頻りに海の上の赤い空へ飛んだ。(編年体大正文学全集／内田百閒)
- ・骨の入った小さな箱が気持が悪かったんじゃないかな、習慣の違いよね。それでみんな部屋のはるか遠くの方から目礼だけして、そそくさと帰って行ってしまうのよ。骨箱に近づきたくないのね。(人生の贈り物)
- ・密林地帯にいたので、新しい患者や、思い出したようにやってくる敵機を除けば、戦争はどこか遠くの方で行なわれているような感じでした。(現代かたぎ考)

<視力関係> (少ない／対で出てくることが多い)

※置き換え可能

- ・でも、めがねはつかれる。遠くのものははっきり見えるようにはなりましたが、近くのものにはぼやけてしか見えません。(いのちをうばった神様)
- ・近視、乱視、あるいは遠視のときは物がはっきりと見えません。また、遠くのものははっきり見えるのに、近くの細かいものがよく見えないときは、老視が疑われます。(目の病気Q&A)

7. まとめ

以上、〈関係〉を表す形容詞「近い」「遠い」の意味・用法を、文法的なふるまいを考慮に入れながら記述し

てきた。

これらの形容詞は、空間の具体的な隔たり度を表す基本的な意味・用法からスタートして、時間的な隔たり、さらには関連性の隔たりという抽象的な関係を表し、最終的には語彙的な意味が薄くなり、「遠回しな肯定／否定」を表すコピュラ的なものまで用法を拡大していた。

全体を通して、次の点は確認しておきたい。

- 1) 空間の具体的な隔たり度を表す基本的な場合でも、関係そのものを表す「AとBは〔形容詞〕」という用法はあまりなく、Bとの関連でAの特性を表す「AはBに／から〔形容詞〕」という用法が多い。
- 2) 抽象的な関係を表すようになると、2つの項の関係を表す構造から離れていく。
- 3) 「近い」の方が「遠い」よりも用例数も多く、用法の広がりも広い。
- 4) 「遠い」はフレーズ化した固定的な表現が多く見られる。
- 5) どちらも、文法化が進むと、婉曲的な表現になる。

特に、最後の5について整理すると、本来「近いー遠い」という距離の遠近を表す形容詞が、時間さらに関係性という抽象的な遠近を表すようになり、最終的に、「一致するかしないか」という肯定や否定に近づいている、ということになる。

近い → 比況・婉曲 ゆるやかな一致

ほど遠い → 遠回しな否定 ゆるやかな不一致

このような婉曲的な表現を語用論の問題として文法論の外に置か、断定とは何かを考えるためにも文法論の中で扱っていくかは難しい問題であり、軽々に結論を出すことはできないが、重要な問題である。

形容詞の記述的研究は、主要な形容詞が主に所属する〈特性〉と〈状態〉の記述からスタートしたが、その段階では時間限定性の問題（これは単に時間的なものではなく、記述の個別・具体性の有無とも関わる）と評価性が重要なポイントであった。しかし、これらの形容詞は、語彙的な意味の多様性は認められるが、文法化についてはあまり問題になることはなかった。

次の段階として、〈関係〉や〈存在〉を表す形容詞になると、これらは先に引用したまつもと（1979）が指摘するとおり、もともと具体的・個別的状态、性質をはなれた関係そのものをしめしているの、語彙的な側面を落としやすく、文法化を受けやすいことが予

測される。本稿における2つの形容詞の帰納的な記述はそのことを端的に示している。

このような視点を持ちながら、「近い」「遠い」以外の〈関係〉を表す形容詞の記述、さらに〈存在〉を表す形容詞の記述を進めていくことが今後の課題である。

謝辞

この論文をまとめるにあたっては、2012年度京都光華女子大学日本語学セミナー（現代日本語学4年生：当時）の学生による用例収集作業と分析・議論を参考にしている。セミナーに参加していた、三澤真登香、農添紅葉、福井望未、小石川あず、吉田瑠璃花の諸氏にお礼を申し上げます。なお、レジュメに掲載した用例の一部は学生たちが集めたものである。

また、本論文のラフの段階で、大阪府立大学の山東功氏および聖心女子大学の小柳智一氏より貴重なコメントをいただいた。いただいたコメントを元に整理しなおした部分も少なくない。

なお、本論文は、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス」によって集めた用例を使用した研究成果である。

注

- 1) この置き換えについての発想は、山東功氏（personal communication）のご指摘による。
- 2) これは記述の順序を示すもので、派生関係を示す図式ではない。
- 3) 本論文で用いる用例のいくつかは、最後の謝辞にあるように、京都光華女子大学の「現代語セミナー」で学生が集めたものである。学生たちは、国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（少納言）を利用したり、本から手で用例を拾う作業を行った。
- 4) この例は「時間が昼に近い」と言い換えがまだなんとかできるが、次の例になると、そのような関係は被修飾名詞との間では見いだせない。形のうえでは、規定語であるが、意味的な関係では「暮方（に）近い」全体が状況語的なふるまいをしている。
・私は彼女と暮方近い林の中を歩きながら…（美しい村）
- 5) これらの「近い」の用法拡大に関して、小西編（1989）などで確認すると、英語でも near と close のそれぞれに類似した用法の拡大が見られる。
- 6) なお、類義表現として「～寄り」というものもある。
・坂本 その彼女の『ビッグ・サイエンス』と『ミスター・ハートブレイク』でも、少しニュアンスが違いますね。／吉本 そういう感じですね。／坂本 『ビッグ・サイエンス』のほうがまだ少しクラフトワーク寄りの匂いがしますね。
- 7) この例は、標高は高いが雰囲気は地底であることを述べている。なお、こういう例があるためか「具体的

距離の近さ」であることを「距離的に近い」という形で明示的に述べることもある。

- ・病気やケガに罹った場合、6割近くの住民は釧路市内の病院に行く。農村部の住民にとっては、海岸部にある町内の診療所に行くよりも、距離的に近い隣りの厚岸町、釧路市内の病院を選択することになる。近いと言っても、自家用乗用車で2時間の距離である。(北海道酪農の生活問題)
- 8) 「Bから」が明示されないことが多く、手拾いで用例を集めていると、明示される具体的距離の場合は、「遠い」ではなく、「離れている」も好んで用いられることが観察できる。
 - ・それから一時間後、成美は湯川と共に海の中にいた。彼女自身がシュノーケリングに夢中になるきっかけになった場所だ。海水浴場からも、人気のダイビングスポットからも離れているので、いわば穴場だ。(真夏444)
- 9) この種の規定語の用法が少ないことについては、中川(2009)などにも言及がある。また、そこでは寺村秀夫氏の談話として「「遠い下宿から通っています」は不自然であるが、遠い国から来た」は自然である。「被修飾名詞が抽象的な場合は、いいのかなあ」と寺村先生は言っておられた。」とある。
- 10) 文語的であり、また連体詞となっているが、「遠からず」という表現もあることを確認しておきたい。
- 11) 井上(2001)によると、英語の far についても次のような指摘がある。「far が from を伴って叙述的に使用される場合、文字通りの空間上の距離を表す意味(「場所」から遠い)と程度という概念上の距離の意味(「～にはほど遠い」「決して～でない」「とても～できない」が生じる。前者の意味を基本形とすると、後者は前者を基にして派生した比喩的な意味になっており、anythig but, fail to, the last to などと同様に否定の意味を表す肯定の慣用表現として用いられる。」
- 12) ここでは、「耳が遠い」「遠い目をして」などの慣用句については記述の対象外としている。
- 13) 「近い」の場合は、「N近い」が規定語として働く場合は「夕暮れ近い林の中を」「夜明け近い浜辺を」など時間を表し、状況語的に働くものに限られている。
- 14) 実際に、業者による代理墓参のことを扱ったテレビ番組で「遠くの親戚より近くの他人」というテロップを見たことがある。

【参考文献】

井上徹(2001)「far from 句の語法をめぐって」『成城大

学文学研究科英文学専攻紀要』42, p 229-340

奥田靖雄(1967)「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8, p 6-16 (奥田1985『ことばの研究序説』むぎ書房所収, p 3-20)

奥田靖雄(1985)『ことばの研究・序説』むぎ書房

奥田靖雄(1988)「述語の意味的なタイプ」(琉球大学講義プリント)未公開、(『奥田靖雄著作集』近刊に収録予定)

工藤真由美(2002)「現象と本質—方言の文法と標準語の文法—」『日本語文法』2-2, p 46-61, くろしお出版, 日本語文法学会

国立国語研究所(2004)『分類語彙表増補改訂版』大日本図書

小西友七編(1989)『英語基本形容詞・副詞辞典』研究社

まつもとひろたけ(1979)「に格の名詞と形容詞のくみあわせ—連語の記述とその周辺—」言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房所収, p 203-313

中川正之(2009)「中国語から見た日本語の文法記述—とくに「多い・少ない・遠い・近い」をめぐって—」『月刊言語』38-1, p 56-63

西尾寅弥(1972)『形容詞の意味用法の記述的研究』国立国語研究所報告44, 秀英出版

八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院

八亀裕美(2014)「現代日本語における「比較」へのアプローチ」『甲南大学紀要文学編』164, p13-22

Heine, Bernd 1997 *Cognitive Foundations of Grammar*. Oxford U.P.

【用例出典】

- ・現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言
- ・京都光華女子大学2012年度「日本語学セミナー」参加学生提供
- ・筆者が手で集めたもの
- 地下街 『地下街の雨』宮部みゆき 集英社文庫1998 (単行本1994)
- 月の 『月のしずく』浅田次郎 文春文庫2000 (単行本1997)
- 真夏 『真夏の方程式』東野圭吾 文春文庫2013 (単行本2011)
- 音楽 『音楽機械論』吉本隆明/坂本龍一 ちくま学芸文庫2009 (単行本1986)
- テレビ 『テレビの21世紀』岡本黎明 岩波新書 2003